令和４年度第１回堺市北区政策会議（書面開催）

「北区みんなのまちビジョンに関する子育て支援施策について」意見聴取の一覧

１　意見聴取テーマ１　子どもの生きる力を育む支援について（資料２）

■幼少期から学齢期にかけて子どもが身につけるべきことはどのようなものでしょうか。

No.	意見内容	意見者
1	○幼少期から学齢期にかけては人間形成の重要な時期と思う。 ○旅行、観劇、買物、家庭内の事（テレビ、食事、洗面、入浴、睡眠等）の体験を積むことが大切と思う。 ○生活リズムを整えるなどの習慣づけが大事。 ○交通の利用方法、自転車の乗り方（交通ルール）。 ○お年寄りのちょっとした仕草や言葉（昔の風習等）など大人の行動から学ぶ、生活の中で体験をとおして身に着けるべき。	天野構成員
2	○他人に迷惑をかけるようなことをしない道徳性（しても良いことと悪いことの認識）、子ども同士の遊びを通してルールを学ぶこと。 ○他人、特に弱者に対しての思いやり、優しい心を育むこと。 ○危険な場所（池、川など）や物（車、火など）に近づかない危険性を認識する力、判断力。 ○特に学齢期（小学校低学年頃）には子ども同士や周りの大人たちとのコミュニケーション力を身に着けるべき。 ○幼い頃からスマートフォン等の情報機器を使わせている家庭も多いと思われるので、その正しい使い方を身につけることが重要と思う。	魚谷構成員
3	○幼少期から学齢期にかけての子どもたちが、のびのびと家庭や学校、地域で過ごし、健康で健やかに育つことを祈念しています。	加我座長
4	○好奇心を育てること。 ○ねんね期から歩けるようになり、走れるようになる、といった目覚ましい成長をする時期に感覚を育てることが大切と思う。柔らかい、固い、ザラザラ・サラサラしている、温かい、冷たいなど、身近な大人と一緒に色々なことを感じて喜び合う。外の空気を感じてたくさん遊ぶことによって心身ともに成長すると思う。 ○自分が愛情を受けている、大事にされていることを感じること。 ○最初は家庭で、その後は集団生活の中で、相手が喜ぶこと、嫌がることを肌で感じながら学び、覚えていくことが大切と思う。	金戸構成員
5	○一貫して必要なことは、自分で生きていけるという自信をつけていくことだと思う。そのための基本は知識、体験、そしてそれらを使って自ら考え、人にそれを伝え、議論をすること、色々な人の意見を聞けるようになること、それに対して自分の意見を言えるようになること、最終的に	清水構成員

	は自分の考え、行動を信じて生きていくこと、これらが基本になってくると思う。	
6	○コミュニケーション力（自分の考えを伝え、相手の話をしっかりと聞くことができる力）、友達を大切にすること、大人への信頼感、安全に関すること（交通安全、防災教育）、自己肯定感、自己効力感、社会への関心、情報リテラシー、協調性、地元への愛着、規則正しい生活習慣、読書習慣。	竹内構成員
7	○体づくり（栄養、運動） ○自分の意見を伝える力 ○楽しいことを見つける、見出す力	長尾構成員
8	○基本的生活習慣（①睡眠（早寝早起）、②食事（３食、特に朝食をしっかりとること）、③トイレ、④清潔（手洗い、洗面、歯磨き、うがい、入浴）、⑤衣服の着脱）を身につけるべき。 ○マナー、社会でのルールを身につけるべき。遊びを通して、他の子どもや大人と接することで、挨拶、コミュニケーションの取り方、約束を守ること、迷惑をかけないこと、思いやる気持ちを育む。	羽根構成員
9	○北区でも都市化は進んでおり、地域で子どもが他者や自然と触れ合う経験が少なくなっています。そのような中で、幼少期の子どもには遊びを通じて子ども同士の体験活動を充実させることが大切と思う。 ○昨今、子どもたちが小学校に進学してから集団生活になじめないという問題が少なからずあるようです。このことを考慮して集団や社会のルールを守る態度など、善悪の判断や道徳意識の基礎の形成、また、自然や美しいものに感動する心などの育成を支援することが重要と思う。 ○小学校高学年になると物事をある程度対象化して認識できるようになるので、自己意識の目覚めや他者への思いやり、実社会への興味・関心を持つきっかけづくりとすることが重要と思う。 ○中学生になると思春期に入り、自己の内面に気づき、自らの生き方を模索し始める時期となる。また、家族とのコミュニケーションが不足しがちな時期でもあり、思春期特有の課題が現れる。これらを踏まえ、他者の善意や支えに対する感謝の気持ちを醸成させ、自立した生活を営む力の育成支援が必要と考える。	坊農構成員
10	○１つめは仲裁能力（self mediate）です。例えば、子ども同士の喧嘩に親や教師などの大人がすぐ仲裁に入るのではなく、出来る限り子ども同士で解決させることが大切と思う。なぜなら、大人が仲裁に入ると、子どもは本音を言わず、仲直りをしたふりをしたりするからです。これでは真の解決にならず、結局大人の見ていない所で、同じことを繰り返すことになります。これでは仲裁能力、問題解決能力を養うことにならないと思う。このような子どもが大人になった時、もめごとやトラブルに自分たちで向き合い、解決することをせず、他人に解決を委ねるなど、民主主義の精	八木構成員

	神が育たなくなると思います。子どもの段階から仲裁能力を養い、お互いの言い分をきちんと聞き、問題点を考え、解決策を見出していく能力を養っていく必要があると思う。 ○２つめは災害等の非常事態においての「生きる能力」です。今はスマートフォンや PC で便利に多くの情報を手にすることができ、必要な物資も簡単に手に入れることができます。しかし、災害等の非常事態が発生すれば、当然に出来ていたことができなくなり、手に入っていたものが手に入らなくなります。また、我欲に走ったり、弱者を排除したり差別したりすることすら起きます。そのような事態を防ぐために、子どもの時から、災害時等の非常事態における「生きる力」「助け合う精神」を身につけ、真の共生社会を築いていく人間を養う必要があると思います。	
11	○主体性、協調性、道徳性や思考力・判断力（自分で考え、判断する力）や表現力（自尊感情を持った自己表現力、コミュニケーション能力）を身につけていってほしいと思う。これらの力（生きていくために必要な力）は全て発達に応じた遊びや生活など体験を通して五感で感じたり、身につけていく事が多い。	吉村構成員
12	○この時期は基本的な生活を送るにあたり保護者の手助けがかなり少なくなってきます。自分のことは自分でできるということが子どもの自信につながり、その自信を土台に様々なことへの興味・好奇心を広げられるのではないかと思う。 ○学齢期には、周りの友だち（同年代に限らず年上、年下も含む）や近所の人、学校の先生との関わりなど、幼少期に比べ大きく世界が広がります。この時期には仲間と一緒に活動することにより、自分の役割や特徴を自ら理解し始めることがあります。 ○幼少期から学齢期にかけて「できること」の個人差は大きく、それを一律に「何才だから●●ができるはず」などと周りの大人が対応しては、身につける途中段階の子どもはスムーズに育たないと思う。子どもの成長発達は丁寧に段階を踏む必要がある。また段階を飛ばすことはその子の土台を弱くさせる可能性があり、させるべきではないと思う。それぞれの子どもがどの段階にあり、どんな発達課題に対するべきかについて保護者や先生など周りの大人は常に確認しておくことが理想だと思う。 ○成長の長期的視点にたった細やかなサポートを周りの大人から受け、子ども達が自らできるという自信を基に、興味や好奇心を広げていくこと、そして子ども自身が周りの人々との関係性を育み、その中での自分の強みや弱み、役割や得意分野などに気がつき、社会の中で自らを活かして生きていける力を身につけるべきと思う。	北口特別構成員
13	○幼少期に身につけるべきことについて、特に２つの点が大切と思う。 １点目は、子どもが自ら興味や関心を持ち、五感を使って遊び、経験する	辻特別構成員

	ことである。経験したことは確かなものとなり、もっと知りたい、もっと遊びたい、もっとやりたいという知識や行動、学習への意欲につながる。 ２点目は、特定の大人との基本的信頼関係を築くことである。何があっても守ってくれるという安心感が、他の大人や友だちへのつながりを広げていく力になる。友だちとのぶつかり合いも経験して違いも知り、相手の思いを尊重しつつ一緒にいる心地よさや遊ぶ楽しさを実感していく。 ○これらのことが基盤となり、これから出会う様々な出来事に対して、自分で考えたり工夫したり、周りの人に相談したり、友だちと協力したりして「生きていく力」につながっていくと思う。	

■「子どもの生きる力の育成」に関して家庭や地域でできることはどのようなことでしょうか。

No.	意見内容	意見者
1	○子どもは大人の姿を見て育ち、大人の仕草を見て覚える。大人が間違ったことをしてはいけない。（言葉で言わなくても行動が大切） ○説明するだけでなく、ささいなことでも生活する中で体験させる。 ○家計簿などによるお金の管理の大切さなども伝えるべき。 ○保護者の方々の大変さを知ってもらう。	天野構成員
2	○家庭では子どもの成長に合わせ、子ども目線で話をよく聞き、子どもに好きな事をさせるとともに、思いやりのある“しつけ”が大事と思う。 ○出来るだけ自然環境（海、山、森などでのキャンプ）に身を置き、同時に多くの人と接し、多くの実体験をさせることが大事と思う。 ○北区に豊富にある公園や農地をもっと有効に活用する方法も考える必要があると思う。例えば、私は複数の家族と一緒に家庭菜園を借り、野菜等の栽培をしていますが、子どもたちも教えを受けながら野菜の水やりや雑草取り、収穫体験をしています。参加する子どもは小学生が多いですが、夏休みの自由研究に「野菜の種まきから収穫までの観察記録」を選んで実行している子どももおります。皆生き生きと喜んで参加しています。 ○自分が子育てをしていた時期は、仕事でいそがしく子育てのことをあまり考えたことはなく、妻任せでした。今は父親も子育てに関わるようになってきていますが、これからはより積極的に関わる必要があると思う。 ○子育ての中心は家庭ですが、これからは、より一層地域共同体の役割が必要になってくると思う。 ○私が子どもの頃（昭和３０年代頃）は大阪の下町（大阪市阿倍野区昭和町）で育ったせいか、地域の共同体は機能しており、子どもへの周りの目が行き届き、悪いことをすれば直接叱ってくれ、その反面、後でお年寄りが家に呼んでくれ将棋などを教えてくれたが、現代の都市では、核家族化やマンションなど集合住宅の普及に伴い、共同体で子どもたちを育てるという意識が薄れていると思う。行政の子育て事業の充実も必要だが、	魚谷構成員

	子育てはコミュニティ全体で行うという意識の醸成が必要で、子どものための家庭以外の居場所作りなどの「共助」を地域全体で考え、強化していく必要があると思う。 ○そのためには、地域活動団体の事業の充実はもとより、地域の資源（大泉緑地での小学生の農業体験、ドングリを使った工作教室などの活動をしている市民活動団体/ボランティア団体など）を活用した、あまりお金をかけない形での様々な事業の展開も必要と思う。 ○地域で子育ての終わった高齢者やこれから子育てに関わる若い人たちとの交流の場を設け、子育てはコミュニティ全体で行う意識の醸成が必要。	
3	○北区公園ガイドブックで紹介された公園、また、その他の公園で、子どもたちが保護者の方と、友達と、元気に過ごし、公園で地域の方々と新たな交流が育まれることができればと思う。 ○地域の公園が子どもの成長の場、地域との交流の場となればと思う。	加我座長
4	○家庭でも「おはよう」「ありがとう」などありふれた挨拶を親からする。話せない乳児のうちから声をかけていくことで、成長と共に子どもからも挨拶が普通になり、地域の人にも自ら挨拶できるようになると思う。 ○家庭では、コミュニケーションしやすい雰囲気を作る。恥ずかしがり屋の子どももいるので、大人からの声かけに返事は強要しない。子どもはよく大人の様子を見ている。 ○危険なことは危ないと都度教えていく。 ○子育てひろばや子育てサークルに参加し、家族以外の人と交流する。 ○散歩をする、公園に出かけるのもよい。資料の北区公園ガイドブックはとても良いと思う。	金戸構成員
5	○一番大事なことは家庭が安心・安全な場であることと思う。家の外で何があっても、帰る家があり、見守ってくれる家族がいる。安心できる場所があることが大事だと思う。 ○子どもの話をよく聞き、否定しない、話を受けて色々な可能性があること、そこにアクセスできる方法などを伝えてあげることでしょうか。能動的に考え、動けるようなサポートが必要と感じます。 ○地域では、子どもを見守ることでしょうか。自分の子も他の家庭の子も同じ目線で迎えることができればと思う。	清水構成員
6	○家庭内や子ども同士の遊びの中だけでは身につけることが難しいと思うので、なるべく地域に出ていくことがいいと思う。 ○地域において親子で参加できる防災訓練を行う。 ○家庭内で親子一緒にニュースや新聞を見る機会を作る。 ○地域に多世代交流できる場を作る（お兄さん、お姉さん的存在と関わる） ○習い事のような感覚で「生きる力」についての講座の開催（小学生向け） ○小中学校と高校・大学生のボランティアが連携した生きる力養成の場	竹内構成員

	（サークルなど）を作る。 ○ボーイスカウトのようなノウハウを活かしたイベント（地域探検など）	
7	○家庭の中での関わりだけになると親の考え方に偏ってしまうことがあると思うので、地域で家族以外の大人の知人を作ることが大切だと思う。 ○子ども食堂、地域活動、小中学校とも連携がとれるとベストだと思う。	長尾構成員
8	○家庭では基本的生活習慣を身につける環境づくり（親自らが手本となる） ○子どもに愛情をそそぎ、親子の信頼関係を築くことが大切。 ○遊び、運動し、自然と触れ合う機会をたくさん作り、心身が健康に育つ環境を作る。 ○地域では、子どもが安心して遊べる場所の提供や、子育て環境が十分でない家庭のサポート、お祭りや行事を通して、伝統行事に触れる機会、地域の多世代の人と触れ合う機会を作り社会性を養う。	羽根構成員
9	○家庭での親の態度が子どもを育てるので、言葉だけではなく、親自身が、真似をされても大丈夫な行動をとることが大切と思う。 ○幼稚園、保育所など地域の子育て支援機能を持つ機関と行政との連携を強化する。公民館等の社会教育施設を活用し、小学校区程度の身近な地域において、子育て中の親へ家庭教育講座などの子育て活動を行い、誰でも参加できるような環境を行政が整備する。	坊農構成員
10	○学校や地域、家庭においても、仲裁能力を養うロールプレイを行う。具体的には、問題を設定し、子どもＡとＢが揉めたと仮定し、それを仲裁役の子どもＣが仲裁し、双方の意見を聞きながら、妥当な解決策を導き出させます。大切なことは、その後の検証で、どうしてそのような仲裁をしたか、他に方法はなかったかなど、他の子どもを交えて話し合う。 ○災害等の非常事態において「生きる能力」を養うことについては、地域などが中心となり、災害時を想定した宿泊を伴う防災訓練や体験学習を実施することが考えられます。具体的には、学校の体育館や地域会館を利用して、携帯電話は一切持ち込まず、電気・ガスも使用せず、薪や炭を用いて食事をつくり、ダンボールベッドや毛布等で寝るのです。大切なことは、計画は子どもだけで決め、実際においても主体は子どもが中心で、大人は見守る立場で、危険なことや間違ったことをした場合、そのつど修正させるのみに徹することです。このようなことを定期的に体験させることにより、災害時や非常時における対応能力を養い、協調性と共助の精神を育んでいけるのではないかと思う。	八木構成員
11	○子どもとの愛着関係（自分が愛されている、大切にされていると感じること）をしっかりと築くことが、あらゆることの基盤のひとつとして大切である。“愛着”の形成が安心や情緒の安定に繋がる。 ○子どもたちの周りにいる大人は、常に子どもたちにたくさんの影響を与える人的環境という意識のもとモデルとなる言動を心掛ける。大人	吉村構成員

	自らが健康な心と体で過ごす。 ○遊びやあらゆる体験ができる環境作り。施策の現状分析（資料 3）からも「子どもに関する取り組み」「生きる力の基礎育成に関する取り組み」についての弱みが示されているが、生きる力を育成するためには、体験できる環境を作ることが必要である。生きる力が弱いということはそれにつながる経験が少ないということだと思う。 ○子どもが“笑顔”で“健康”に“繋がり”を実感できる地域づくり（日常の挨拶から社会で育むという大人同士の共通認識）	
12	○子どもが自分でできることへの自信を深めること、周りの友だちや異年齢との関わり、さらには大人との関わりを広げ、深める時期であることを家庭や地域が理解し、サポートしていくことが重要だと考える。 ○例えば、ささいなことでも友だちと一緒に企画を考え、実行するための方法や準備を子ども中心で行い、実際に実行させてみるなどのイベントが良いと思う。ただ、子どもも経験していないことはどのように進めればよいのかわからないので、例えば、まずは大人と一緒にやってみることで大まかな流れや手順を知り、次に高校生や中学生など、大人より心理的距離が近い年代がサポートしながらやってみる、そして最後には小学生中心に最初の企画から最後の片付けまでやってみるという経験を積ませることなどが考えられる。 ○コロナ禍で色々な制限もあり実現は難しいかもしれないが、子どもたちで運動会をする、お店屋さんやお祭りごっこをするなどが考えられる。 ○子どもたち中心で進める中で、うまくいかないことや意見のすれ違いから喧嘩になったり、「もうやらない」とあきらめる子も出てきたりするかもしれない。そこをどのように導くのかについては、日頃からこのようなことに携わっている団体からのアドバイスが必要になるかもしれない。	北口特別構成員
13	○家庭では、「子どもはかけがえのない大切な存在であることを子どもにしっかりと届くように表現すること」また、親戚や友だちなども含めて「様々な人との交流や繋がりを大切にし、子どもにも体験する機会を与えてあげること」だと思う。 ○地域では、子育て中の親子に温かい眼差しを向けることや優しい声をかけるなど、「子どもは日本の明日を担ってくれる大切な宝」と伝えることができたら素晴らしいと思う。また、年齢の違う子どもたちや大人、お年寄りなど様々な人と交流する場があることが重要だと思う。 ○大人も子どもも地域での様々な人との出会いから、多様な見方や考え方を自分に取り入れる力につながると考える。核家族が増え、地域のつながりが希薄な今だからこそ、子育て家庭の保護者が安心して子育てできるように支援することが第一だと思う。 ○資料では、子どもの生きる力を育む支援について「子ども自身への支援」	辻特別構成員

	「生きる力の基礎養成」に関する取り組みが弱いとある。様々な取り組みが子育ての支援という視点で行われているためと思われる。しかし、子育てにおいて保護者の不安や孤立などの課題を解決すれば、子どもの課題も自ずと解決する点もある。 「子どもの生きる力を育む」をテーマに、現在の活動をより豊かに展開できるように、幼少期から学齢期に応じた新たな取り組みを継続していく。また、地域との連携においてもテーマを共有して、子どもたちの育ちを見守るつながりを広めていくことが重要であると考える。	

２　意見聴取テーマ２　孤立を防ぐ子育て世帯間や地域とのつながりについて（資料４）

■子育て世帯が求めている子育て世帯同士や地域とのつながりとはどのようなものでしょうか。

No.	意見内容	意見者
1	○子ども中心にして体験できる場で親のつながりをつくればよいと思う。 ○地域の子どもたちが集まる組織子ども会。 ○スポーツ、ゲーム等の遊び、ハイキング、手品や紙芝居など。	天野構成員
2	○子育てに関する悩みや困りごとを相談できる同じ子育て世帯の友人や親族が周りに存在しており、いつでも気軽に相談できること。 ○子育て世帯同士や地域住民と気軽に交流できる場所が身近にあること。 ○子育て世帯に優しい地域であること。 ○身近に支援者がいない子育て世帯（特にひとり親家庭や生活困窮世帯）は、行政に気軽に相談できる窓口があり、特にキメの細かい支援（金銭的な援助の充実含む）を受けることが出来ること。	魚谷構成員
3	○困ったときに気軽に頼れる人が地域に一人でも多く、見つけられるようになればよいと思う。	加我座長
4	○子育て世帯にとっては「ゆるっと入れて親子で楽しめる場所」があればよいと思う。必ず行かなければならないとなると負担になるが、外に出ようと思ったとき行ける場所があると助かると思う。 ○公園に遊びに行くのも楽しいが、夏の暑い時期、冬の寒い時期は屋内がありがたい。 ○親が子育てに悩んだときに相談しやすい場が地域にあると助かる。 ○時々会えて近況報告をしたり、子供の成長を見守りながらつながる。 ○地域の人々との交流は、会えばお互い挨拶を交わせるような関係がよいと思う。 ○お互いの生活リズムが異なるので、長話になるのも困るが、全く他人と話をしないのも寂しい気がする。	金戸構成員
5	○心の問題はコミュニケーション、実質的な問題はサポート体制（子どもを安心して預かってもらえるなど）。	清水構成員
6	○子どもの遊び仲間	竹内構成員

	○子育ての悩みを聞いてくれ、子育てに関して何か知りたいときに気兼ねなくすぐに答えてくれること。 ○子どもを安心、安全に預けられるような仲間や居場所。 ○近隣での同年齢の子どもの親とのつながり。 ○疲れないつながり。	
7	○気軽に助けてほしいという声をあげられる関係。 ○まずは知り合いを増やす。 ○子育てを助けてもらってとにかく息抜きがしたい。	長尾構成員
8	○親の立場では親同士が交流できる場所、子育てに関して相談できる場所、行き詰まった時に息抜きできる場所、困った時に気軽に頼める関係。 ○子どもの立場では、子ども同士の交流の場、色々な遊び体験、自然、動物や芸術に触れる場。 ○専業主婦と、働いている人とでは多少ニーズが変わると思う。 ○校区の子育てサークルに携わっている方によると、コロナ禍の影響もあるかもしれないが、今は利用者がとても少ないようです。地域会館で月１回平日２時間程度開催で、最近は１名ほどしか来られないようです。以前は近くの保育園から保育士さんが来られて相談に乗り、遊びのアドバイスをしてくださったりしたそうで、その頃はもう少し利用者が多かったとのこと。運営の手伝いをされている方も、特に専門的な知識も無く、ニーズに応えることができないそうです。 ○保育園の協力を得て、園庭開放の回数を増やしたり、買物ついでに立ち寄ったりできるようにショッピングセンターの子ども用品売り場などで、遊びの広場のようなスペースを設け、専門家による相談ができる場を設けるとよいと思う。子育てサークルなどで不要になった子ども用品を譲り合える機会を設け、妊婦さんにも呼びかけ、子育て経験者と交流する場を設ける。（平日だけでなく、土日もあればよい） ○就学児対象に小学校の空き教室等を利用して、宿題の見守り、ゲーム以外の部屋遊びを高齢者の方に教えていただく。一緒にお菓子作りや、子ども食堂なんかが出来るとよりよいと思う。 ○共働き世帯では、病気で保育園に行けない子どもさんの見守り、残業などでお迎えに間に合わない時の子どもさんの送迎、買物、調理の援助など有償であっても、あればとても助かると思います。親が病気の時もこれらの助けがあれば助かります。	羽根構成員
9	○北区は通勤の交通利便性が高く、自然環境もよいので子育て世代が多いが、転入・転出者が多く、近所づきあいや地域活動に充分な時間を割くことができず、地域の中で孤立する若い世帯の増加が想像される。そのような世帯では、出産や子育てを考える時に、身近に相談できる相手がいないことや、地域にどのような子育て支援のサービスがあるかがわからない	坊農構成員

	ことがあるかも知れない。子育てで困った時に子どもを預けられる人がいない等、地域の中で孤立すると子育てによる負担感の大きさがうかがえます。 ○公営団地や公民館を利用し、一品持ち寄りランチ会などを週１回程度開催して子どもの病気情報を話し合うなど、子育て世帯がコミュニケーションする“場”を提供するのはどうか。また、コミュニケーションする“場”のサポーターとして高齢者向けケアマネージャーのように子育て支援ケアマネージャーのような制度を設けて若い世帯が子育で孤立しないような仕組み作りが必要ではないだろうか。	
10	○北区は転入・転出が多く、転勤族が多いように思われます。このような状況において、子育て世帯同士や地域とのつながりは、東京大学の上野千鶴子名誉教授の言われる「緩い紐帯」が望ましいと思う。すなわち、必要以上の深い絆を求めず、お互いの生活に干渉せず、それでいて情報を交換でき、子育ての悩みや疑問を相談できる関係です。そのためには、月に１度（あるいは週に１度）程度、地域の会館や市の施設等に集まり、意見交換をしたり、憩いの時間を設けること、あるいはリモートでの意見交換会のようなものを設けてもいいのではと思う。	八木構成員
11	○気軽に話せる環境や居場所、情報交換の場（話し相手）。経験がない中での子育て、核家族化による母親への育児負担、溢れる情報などの子育て背景がある。気軽に話せる相手や温かい見守り、居場所を求めている。母親自身が応援されていると感じる対応が必要と感じる。（町会、各地域での『ようきた（北）ね。』版など）	吉村構成員
12	○自らの経験として、子どもが成長していく過程をともに共有できて、親としての悩みを相談したり、お互いの子どもの成長を喜び合ったりできる子育て世帯とのつながりを求めていた。 ○地域に対しては、近くに赤ちゃん連れの親子が住んでいることを知っていただき、お互いに挨拶したり、声掛けしたりができる関係を求めていた。その中から会うと子どもの成長を喜んでくださる方もいて、それがとても嬉しく、励みになった。また、子育てサークルで民生委員の方と顔見知りになれることはとてもありがたかった。我が家の地域は昔から住んでいる方が多く、元々つながりのある地域であるため、民生委員を中心に一度顔見知りになれば挨拶を交わし合う関係は築きやすかったが、マンションなどでは関係を築くのが難しい場合があると想像する。 ○一方で、近所付き合いは面倒に思う側面も多く、また関わることで役員などの役割が回ってくることを嫌う家庭やそもそも地域とのつながりが希薄な地域もあるだろう。そして地域の全世代とのつながりを必要としていない、子育て世帯とのつながりのみを求めている方もいる。 ○しかし、地域とのつながりのないまま成長する子どもたちへの影響も	北口特別構成員

	懸念される。子どもたちが近所の人と挨拶ができない、お互いに顔すらわからないというのは、子どもたちに何かあった時に適切な支援・手助けを差し伸べられない心配もあるし、子どもたちが大人になる過程で異年齢との関わり方を学ぶチャンスも失うことが考えられる。子育て世帯とのつながりは子ども同士の友だち関係などから少しずつでも出てくるものだが、地域とのつながりはそこにある有益性に気がつかなければおろそかにしてしまうかもしれない。 ○子育て中の時期には地域から孤立していることを不安に思い、支援を求めていたが、子どもが大きくなった今、自分たちは受け身な立場だけではなく、発信していく立場でもあると感じた。支援してもらうばかりではなく（もちろん、支援優先の世帯もある）、自らも地域に関わり、地域の活性化に貢献することが、子どもたちが住みよい地域になるという発想を伝えていくこともとても重要である。 ○子育て世帯とのつながりとして、お互いの子どもを見守り、助け、成長を喜びあえるつながりは大切と思う。そのような関係が小学生以降では誰かのママが叱ったり、ほめたりしながら見守ってくれているからこそ、安心して子どもを近所で遊ばせられている。できればそこに地域の人たちの見守りもあるとさらに安心だが、そのためには子育て世帯も地域に関わり、子どもがのびのびできる地域となるよう作っていくことが重要だと多くの世帯で実感できたら、孤立する世帯も減るのではないだろうか。	
13	○子育て世帯同士のつながりについては、子育てに関する情報や知識の交流ができること、子育ての心配や迷い、悩みなどを話せる人や友だちとつながる場があることだと思う。そのためには、子どもが安心して遊べ、保護者がほっとできる場や時間が保障されることが必要である。子育てひろばや子育てサークル、園庭開放などが、大きな役割を担っている。 ○子どもが遊べるスペースやコーナーのある商業施設や、レストラン・カフェなどが増加し、情報発信することで、親子が気軽に出かける機会が増え地域との自然なつながりも生まれてくると思う。 ○直接のつながりの場に加えて、子育て世帯がすでに使用しているSNSなどを活用する。気軽につながれるツールとして、また様々な情報や知識、アドバイス、交流など、自分に必要な内容を選び生かしつながることができると思う。	辻特別構成員

■コロナ禍でも子育て世帯同士や地域でのつながりを持ち続けるため、新たなアイデアとしてはどのようなことが考えられるでしょうか。

No.	意見内容	意見者
1	○コロナ対策を充分に行ったうえで、例えばネットを活用し、校区内各町会の会館に分散して少人数で集まるなど工夫しなければならない。	天野構成員

	○地域で集まるにあたっては自治連合会や子ども会に未加入の子どもも誘う。家族以外で普段接していない人とつながれる。 ○学校もコロナの影響で色々な制約がある。コロナ前には自然とできていたことができずに子どもがかわいそうなので、つながりの中で色々と体験させてあげたい。	
2	○子育て世帯同士（友人や親戚など）では既に連絡手段としてLINEを活用していると思いますが、行政の担当窓口でもLINEを活用した相談コーナーを設ける。 ○家庭の事情でスマートフォンを持つことが難しい世帯には行政から貸与（簡易な機種でも可）し、お金をかけずに気軽に相談できる制度の設置。 ○行政以外の地域住民（ボランティア）の活用もできると思う。 ○北区にたくさんある公園など開放的な空間を利用した交流の場を作り、コロナ禍でも、室内と違い、安心して子育て世帯同士や地域住民と交流できるイベントを企画する。 ○親子の農業体験、公園の木々（ドングリなど）を使ったモノづくり体験教室など、地域の市民活動団体やボランティア団体を活用したイベントを企画する。 ○新型コロナ感染に気を付けながら、学生たちとのキャンプなど野外活動を通した子育て世帯とのふれあいの場を作る。	魚谷構成員
3	○地域の身近な公園が子育て世帯同士や地域でのつながりの場となることを祈念しています。	加我座長
4	○オンラインで参加できるテーマ別の交流会などがあると家にいながら地域の人と交流できると思う。子育て中は長い時間を確保することが難しいので、短い時間で実施するのがよいと思う。 ○実際に大勢集まることはコロナ禍では難しいので、人数を制限しなくてはならないが、少人数で楽しめることもあるのではないかと思う。	金戸構成員
5	○SNSでつながる、ZOOMなどで顔を見ながら話せるなど、対面でなくともコミュニケーションは可能な時代になっている。 ○個別の趣味や似たような考え方や悩み別にコミュニティがあれば、入っていきやすいと思う。	清水構成員
6	○保育士や幼稚園教諭を目指す学生との関わりを作る。 ○SNSを使ったやり取りの活発化。 ○民生・児童委員（その他ボランティア）による訪問。 ○保育園、幼稚園をプラットフォームに地域が連携協力していく。	竹内構成員
7	○SNS。 ○感染予防対策をしたランチ会、オフ会。	長尾構成員
8	○コロナ禍で孤立したママさんが大勢いたため、オンラインでママ同士がつながるアプリが急増しているようです。「MAMATALKママ同士で繋が	羽根構成員

	るコミュニティアプリ」というマッチングアプリや「オンラインお茶会」など色々な選択肢があるようです。オンラインで知り合って、実際の交流まで発展するケースも多いようです。 ○最近は感染対策をしながら、子育て支援事業も再開されているようです。オンラインや SNS でも繋がることができますが、やはり対面でコミュニケーションを取るのが一番だと思う。	
9	○コロナ禍では“密になること”は避けたいです。これは対面でのコミュニケーション作りに大きく影響を及ぼすものです。そこで対面が難しい状況でも保護者とのコミュニケーションを図れるように北区の教育・保育施設に ICT を活用することを提案します。 ○例えば、これまでの子育てコミュニケーション活動を継続させるためにオンライン参加による開催。加えて、育児に関わる個別オンライン相談や SNS による子育て掲示板の開設。さらに世帯同士や地域でのつながりを持ち続けるためのツールとして ICT を用います。	坊農構成員
10	○コロナ禍では、リモートによる意見交換会が望ましいと思う。ZOOM や Remote Meeting を用いて、一定の日時を決めて意見交換会を行う。その際は、行政や地域の担当者が主催となり、事前予約制とし、参加してもらうことがよいと思う。 ○行政や地域のサイトに「子育てコーナー」を設け、そこに悩みや意見、出来事などを自由に書き込んでもらい、意見交換の場とすることもよいのではと思う。	八木構成員
11	○北区にはたくさんの子育て支援施策がある。これらの目的や状況を整理し、深めることで課題解決に繋がるように思う。（施策一覧表にある子ども欄に☆がつくためには？何が必要かを考える。保護者が happy なら子どもも幸せなはず。目指すは子ども・保護者・地域の全ての欄が☆） ○できるだけ早い段階でつながれる機会を増やしたり、強化できればよい。マタニティ教室・サロン、エンジェル交流会など回数を増やしたり、地域単位で実施する（共通点のあるメンバーで回を重ねることでつながりを深める） ○こども園や保育園で毎月行っている園庭開放、一時預かりは、地域に開放された大切な子育て支援施策である。育児相談や支援につながることが多い。 ○地域で親子あそび体験を増やす。 ○子育て支援の整備として、堺市公共施設等の利用料を無料（半額）とすることなどが考えられる。 ○SNS の活用	吉村構成員
12	○コロナ禍でも可能な範囲で対面でのイベントがあるとよいと思う。オンラインでの交流は、人にもテーマにもよるが、世帯や地域でのつながりと	北口特別構成員

	いうことではいきなりオンライン交流は難しく思う。 ○例えば、コロナ以前に自治会が開催したイベントで、地域にある留学生寮の学生と交流するというものがあった。留学生に母国の様子を伝えてもらったり、母国の子どもが楽しむ遊びを一緒に体験したりするというイベントであったが、海外の方と直接交流できる場は貴重であり、また地域に留学生寮があることを知ることができ、子どもたちも留学生の国の話を興味深く聞いており、とてもよいイベントだったと思う。また、「校区別遊ぼう会」は地域の小学校を借りて実施され、以前は休憩時間に小学生が赤ちゃんと交流する時間も設けられていた。 ○それ以外にもこれまで見聞きした試みでいうと、例えば子育てひろばを小・中学校に出張して実施したり、地域の公民館を飛び出して小学校体育館を借りて子育てサークルのイベントを企画実行するなど、子育て世帯のつながりの場の範囲を広げ、また地域あるいはその地域にある団体を巻き込んで行うイベントなどができたらよいと思う。 ○アンテナをつねにはっている世帯だけでないので広報にも工夫が求められると思う。その点、行政のお知らせは広く行きわたりやすいため、今後さらに活用することも望まれる。	
13	○対面で会うことが難しいコロナ禍で、必要に迫られてデジタル活用が進んだ。今後も、SNS や LINE、オンライン相談、リモート交流会などのデジタを活用した情報発信やつながりのツールとして活用を進め定着していくことが重要であると考える。 ○SNS などの活用は、現在の子育て世帯には生活の一部となっている。自宅にいて必要な時につながり、終えることができる。より広く様々な意見や人とつながり、意見を参考にしたり相談したりできる。直接出会える機会の持てる人には、必要に応じて活用してもらう。特に直接出会う機会を持てない人や持ちにくい人に、選択肢として提供できれば、新たなつながりを生むきっかけになると思う。	辻特別構成員